

水稲 セジロウンカ・トビイロウンカについて



図1 セジロウンカ成幼虫（左から、雄成虫、雌成虫、老齢幼虫）



図2 トビイロウンカによる坪枯れ



図3 イネに寄生するトビイロウンカ

1 生態

セジロウンカ（成虫の体長は4.0～4.5mm、体色は白色。胸部背面は黒いが真中に長楕円形の白紋を有する。）とトビイロウンカ（成虫の体長は4.0～4.8mm、体色は雌で褐～暗褐色、雄で黒褐色。）はともに海外飛来性の害虫で、毎年6月中旬～7月中旬ころ、梅雨前線に沿って流れ込んだジェット気流に乗って、大陸から飛来する。セジロウンカは、7月中旬～8月中旬に発生のピークを迎え、被害をもたらすことから「夏ウンカ」と呼ばれる。対してトビイロウンカは世代を重ねるごとに発生量が多くなり、9月頃に発生量のピークを迎えることから「秋ウンカ」と呼ばれる。

【セジロウンカによる被害】

成幼虫による吸汁、成虫による産卵傷によりイネに被害を与える。飛来が多い年は、飛来成虫による加害で移植間もないイネが被害を受け、枯死する場合がある。また、幼穂形成期～出穂期には吸汁により養分・水分を吸われ、収量が低下する。幼虫は特に穂を好んで吸汁することから、籾の褐変やスによる黒変を生じるほか、玄米では黒点米を発生させるため等級低下を招く。

【トビイロウンカによる被害】

増殖力が高く、幼虫や短翅型成虫の移動性が低いため、株への寄生虫数が急激に増え、吸汁により株が枯れ上がり、ひどい場合には坪枯れを生じる。坪枯れが生じない場合でも、登熟歩合や千粒重の低下により減収となる。

2 発生状況

セジロウンカは、6月下旬頃に初飛来が認められ、8月上旬に発生ピークを迎える。飛来するセジロウンカは、山際のほ場など地形的に落ちやすい場所があり、そのような地域では毎年セジロウンカの発生が多くなるため、飛来後の発生状況に注意が必要である。また、近年作付が増えている飼料用イネについて、インディカ系統の品種を栽培する場合、一般的にジャポニカ品種よりセジロウンカに対する殺卵反応が弱く、被害が発生しやすい。このほか、本県の奨励品種である「あさひの夢」については、日本産ジャポニカ品種に普遍的に認められる殺卵型抵抗性に関する遺伝子を有していないことから、セジロウンカの発生が多くなる可能性がある。

トビロウンカについては、近年では令和2年に県内で広く発生が認められ、秋に坪枯れによる被害が多発した。今後も大陸からの飛来があった場合は、被害につながる可能性があるため注意が必要である。

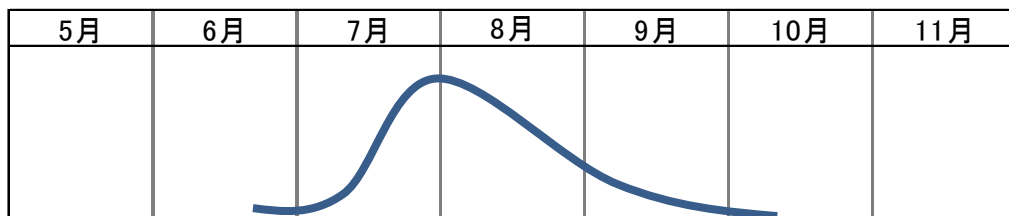


図4 セジロウンカ成虫の発生消長

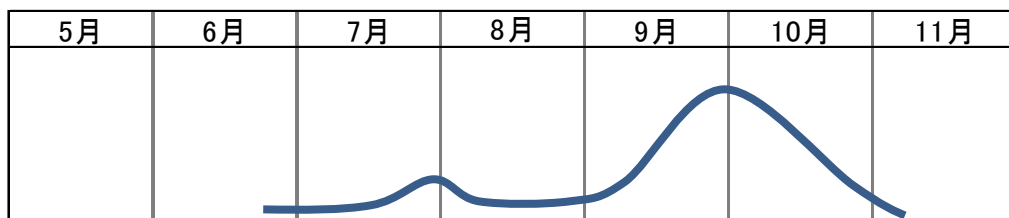


図5 トビロウンカ成虫の発生消長

3 防除対策

(1) 薬剤による防除

両種とも、長期残効性のある箱施薬剤により飛来初期の防除を行うことが効果的である。

セジロウンカは飛来2～4日後から産卵を行い、卵期間6～7日、幼虫期間12～14日を経て成虫となる。散布による防除は、防除所の発生予察情報やほ場の状況に注意し、飛来成虫の次世代幼虫の発生最盛期に行う。

トビロウンカは8月中下旬以降の第2世代～第3世代成幼虫の発生最盛期に防除を行う。なお、一部の薬剤に対する感受性の低下が報告されているため、注意して薬剤を選定する。

両種とも幼虫は株元近くに偏在するので、薬剤は株元までしっかりかかるように散布する。